

〔江戸時代の絵画展によせて〕

宮川長春筆美人図について

— 紙本著色 たて 90.5cm、よこ 35.0cm —

一見したところ、この立美人はたいへん艶(なまめ)いた姿をしています。この女性の最大の魅力は、その目につき易い艶かしきにあるのではなく、全身に張りつめたある種の爽やかさにあるのではないか、という気がしてきます。

左を懐手し、右で軽く袂をとって見返る姿や、振り返った顔(おとがい)を襦袢の衿に埋めたそのふくよかな頬の様は、確かにまことに艶なるものであります。ところがその装いを見ますと、白地に緑と藍の笹を描いて淡墨の小笹を散らした小袖と言ひ、黒地に市松文様の帯と言ひ、実にさっぱりした作りですし、加えてその簡素な髪形や素足に草履の拵えは、一層この女性に清楚な雰囲気漂わせています。しかしながら、この女性の気品を生んでいる最大のポイントは、やはりその目元、口元にうわ付いた感じが全くないという点にあると思われまふ。

吉原に詳しい『花街漫録』(文政8年(1825)刊)には、この立美人図とたいへんよく似た図が載っていて、その図に添えて筆者の西村伊之は次のように言っています。この図は菱川師信(?~1714)の絵を写したものであるが、誰を描いたものか定かではない。しかし、師信は、遊女を描くのだったら高尾、薄雲にかぎる、と常に言っていたと聞くから、察するところ、この絵の女性は薄雲太夫だろう、と言うのです。宮川長春(1682~1752)が菱川派に習ったことを考えますと、彼の描くこの美人図が、師信の見た薄雲太夫の面目を今に伝えているのではないだろうか、と想像してみることもできましよう。

当時の遊女にはいくつかの段階があり、その最上の位である太夫になる資格は、容色や音曲に秀でているだけではだめで、茶、香、花、その他雑芸を嗜み、和歌も文

章も書も一級品でなければなりません。中には『八代集』や『源氏』を手放さない太夫や、無点の漢文を読んだ太夫もいたと言われています。要するに、太夫ほどの教養を受けた女性は、当時の武家にも公家にもいなかったのです。

画上の題賛「仏は法をうり祖師は仏をうる汝は五尺の骸を売て一切衆生の煩惱を易す 柳緑花紅の色々 水の面によなよな月はかよへども心もとめず影ものこさず」これは、沢庵禅師(1573~1645)の言葉を、江戸千家の開基川上太白(1715~1807)が記したものです。

一読、画品を損う賛のようにも思えますが、沢庵、師信、長春、太白といった人物が生きた江戸文化の、多分に洒落っ気を含んだ雰囲気の流れにそって考えてみますと、なまじっかな恋歌などを添えるよりは、よほど気が利いていると思われまふ。また、たとえば薄雲太夫なら、この賛文にどのような応えをするだろうか、などと想像してみるのも、なかなか面白いことではないでしょうか。

(早川聞多)

(右)長春筆美人図

(左)薄雲之図
〔『花街漫録』より〕